

みやぎむらみよさわかきじんじや

# 宮城村三夜沢赤城神社採集の中世遺物について

追川 佳子

## 1 はじめに

群馬県における中世瓦の類例は、極めて少ないものの、僅かながら増加の傾向にある。一方、中世土器資料の増加には、めざましいものがある。近年刊行された『高崎市史 資料編3 中世I』<sup>(1)</sup>は、その集大成の一つといえよう。

本稿では、赤城山南麓に鎮座する式内社三夜沢赤城神社境内において採集した、瓦を含む中世

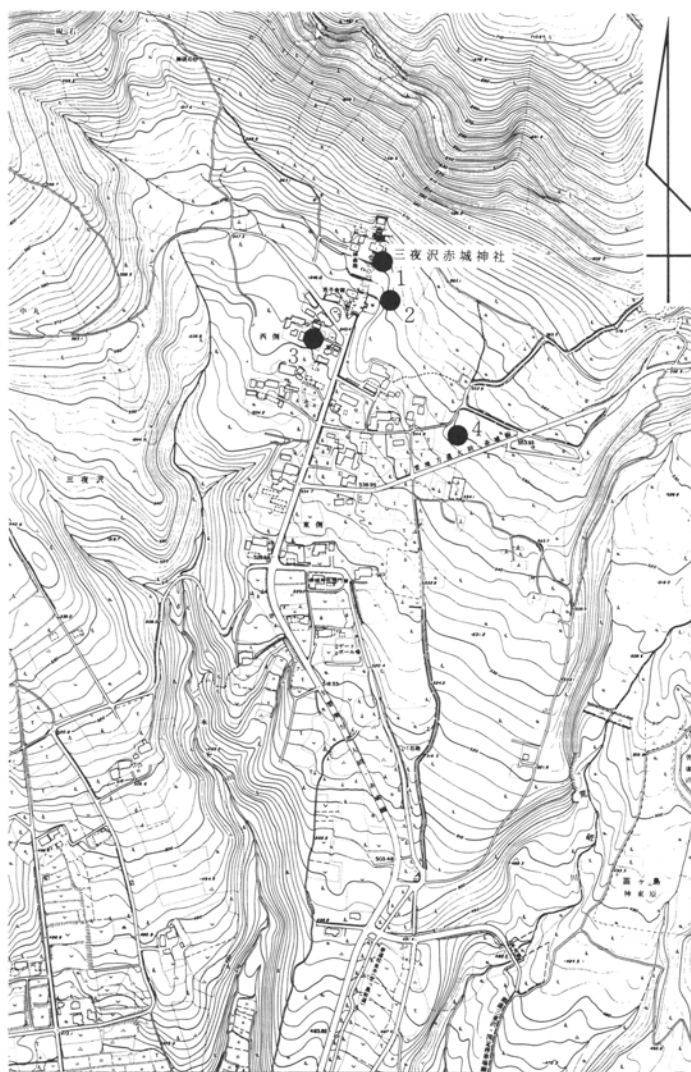
遺物を紹介することにより、当社の考古学的資料提示と、希少な中世瓦の類例の増加を図ろうとするものである。

## 2 位置と周辺遺跡

三夜沢赤城神社は、勢多郡宮城村大字三夜沢字境内に鎮座する正一位(『延喜式』では、従五位下)の格式を有し、赤城山を自然神格とする上野国二宮である。祭神は<sup>おおむなちのみこと</sup>大己貴命と<sup>とよきいりひこみこと</sup>豊城入彦命で、近世以降赤城神社の本社とされている。

鎮座地は、標高550m程の緩斜面部であるが、社殿の後背地は急斜面となり、地形上の変換点にあたる。翻って、赤城山南麓の南方平野部より望むと、南麓のほぼ中央に位置している。

当社近辺は、<sup>(2)</sup>『群馬県遺跡台帳I(東毛編)』によれば、周知の遺跡には認定されてい



第1図 三夜沢赤城神社位置及び遺物採集位置図(1:10,000)

ないが、隣接地で古代遺物の散布が確認されている。(第1図4)

周辺遺跡では、当社北西方向約1.2kmの急斜面を登り詰めた尾根上、標高877.9m地点に、「櫃石」と呼ばれる磐倉が所在する。

櫃石は、<sup>(4)</sup>『日本三代実録』の元慶四年(880)五月二十五日条に記述が認められる「赤城石神」にあてられ、赤城神信仰の発祥とも考えられている。

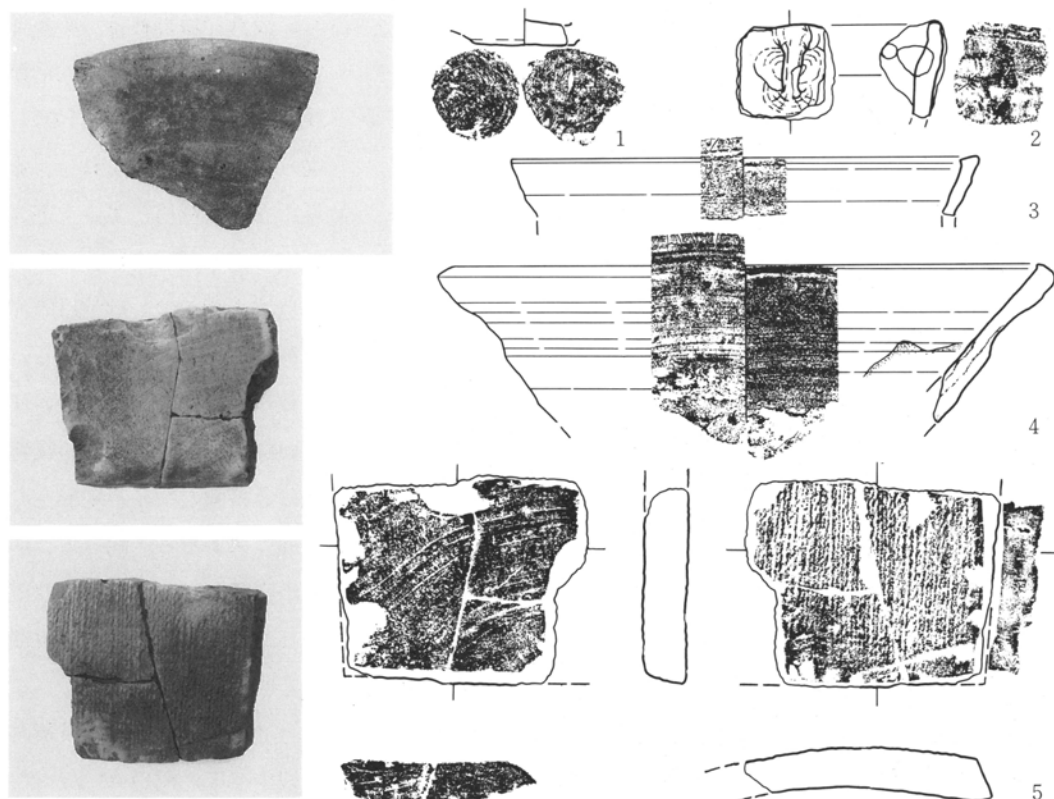
当社東方約2kmの尾根には、宇通遺跡(寺院跡)<sup>(5)</sup>(勢多郡粕川村大字赤城山)が所在する。また、南西方向約2.5kmの尾根には、やはり寺院跡に関係あると見られる柏倉十文字遺跡(勢多郡宮城村大字柏倉)が所在する。このような周辺状況により、古代の信仰形態の一端を窺うことができる。

また、中世の遺跡としては、当社北東1.5kmに、宿の平城跡(山城)(勢多郡宮城村大字苗ヶ島)が所在する。

### 3 採集遺物

今回紹介する遺物は、次の5点の中世遺物であるが、この他に縄文式土器などがある。採集地は、1から3が当社南西に広がる平坦地(第1図-3)、4(第1図-2)5(第1図-1)については、境内である。(第2図参照)

以下、遺物個々についての観察を述べる。



第2図 採集遺物実測図および写真(1~4は1:4、5は1:5)

1 円盤(転用) 土師質土器皿(カワラケ) 観察○土師質土器皿の底部を利用する円盤で、体部の大半を打ち欠いている。体部は、高さ0.3mm程の底面から丸味を帯びた状態で立ち上がっているが、欠損が著しく詳細は不明である。左回転の轆轤成形で、底面は回転糸切りである。○胎土は粗く夾雑物が多く、白色粒子・黒色鉾物粒子・石英等が多い。鏡下では多孔質である。○酸化焰焼成で軟質である。○鈍黄橙色を呈す。所見○底径が小さく、器厚が厚いことから15世紀の所産と考えられる。

2 軟質陶器 内耳鍋形土器 観察○耳部を含む口縁部のみの残存である。紐作り後、轆轤成・整形と考えられる。耳部は、取り付け後に基部を整形し、全体を篋撫整形を施している。○口径は不詳。器厚は1.1cmを計る。○胎土はやや粗く夾雑物には石英・黒色鉾物粒子・黒色粒子等を含む。鏡下では空孔が目立つ。○外面は暗橙色、内面は灰橙色から鈍黄橙色を呈しており、焼成は酸化焰から中性焰と思われる硬質である。所見○口縁部、耳部の特徴から、15世紀の所産と考えられる。

3 軟質陶器 内耳鍋形土器 観察○口縁部のみの残存。やや曲線的に立ち上がる。○紐作り後の轆轤成・整形と考えられる。器厚は2より薄く0.7cmを計る。○口径は推定で24.8cmを計る。○胎土は粗く、石英・透明鉾物粒子・黒色鉾物粒子・白色鉾物粒子・黒色粒子を含む。○焼成は還元焰焼成でやや硬質である。○内面、外面ともに灰黒色を呈す。所見○口縁部が直線的で、器厚が薄いことから、15世紀後半から16世紀前半の所産と考えられる。

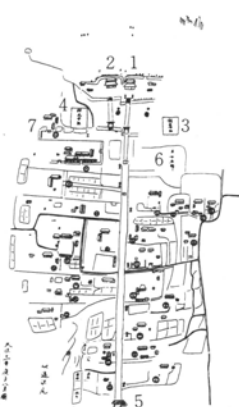
4 軟質陶器 鉢 観察○口縁部のみの残存である。○紐作り後の轆轤成・整形であるが、体部外面は、整形が粗い。轆轤の整形単位は狭く、轆轤回転が早目であったと思われる。器内面には少量であるが、煤が付着している。○口径は推定で33.0cmを計る。○胎土はチャート(灰色)円粒、黒色鉾物粒、石英粒を含む。○還元焰焼成でやや硬質である。○内面は黒灰色、外面は灰色から灰褐色を呈している。所見○口縁部立ち上がりの角度と口唇部の特徴から、15世紀の所産と考えられる。

5 平瓦 女瓦 観察○左狭端側部のみの残存である。○表裏面には粘土剥ぎ取り痕が残存し、凸面の全面には絡状体状の縄叩きを施す。側部喰出段は、同部の欠損が多いため確認出来ない。端面面取りは1回である。成形は離れ砂の痕跡等から、一枚作と判断される。○器厚は2.3cmと厚い。○胎土はシルト質の素地で、白色粒子、白色鉾物粒、黒色鉾物円粒を少量、微粒長石を多量に含む。○還元焰焼成で軟質である。○色調は灰色を呈す。所見○成・整形技法の特徴および器厚から、13世紀の所産と考えられる。また 胎土の特徴から埼玉県美里町所在の水殿瓦窯跡の製品と思われる。

#### 4 ま と め

今回採集された遺物には、水殿瓦窯跡とも推定される13世紀の女瓦、および15・16世紀の生活の痕跡ともいえる軟質陶器類がある。これらの資料は、中世三夜沢を語る上で重要な資料提供となったと考える。特に、鎌倉時代に瓦葺建物の存在が強く示唆される点は注目に値する。

中でも瓦は、中世社寺建築の様式と考えあわせると、社殿等の神社建築物に所用したとは思われず、寺院等の建築施設に伴うと推定される。



第3図は、現地形(1:10,000)と天保十一年絵図(写)〔「宮城村史」より〕を対比させたものである。絵図は、凡そ1:10,000に近い縮尺に対比できるようにした。絵図(写)の所見として、切妻造の建物は、俯瞰し、入母屋ないし寄棟造の建物は、正面図として表現している。また、図としての精度も高く任意縮尺で、現地形にほぼ符号している。

A. 拝殿 B. 神楽殿 C. 本殿 D. 竜赤寺跡 E. 神光寺跡  
F. 総門跡 G. 采女屋舗跡 H. 現駐車場  
I. 中世石造遺物散布地 J. 現総門 K. 石殿(石宮)  
L. 第2図-5(瓦)採集地点 M. 第2図-4(鉢)採集地点  
N. 第2図-1~3 採集地点

1. 東宮? 2. 西宮? 3. 竜赤寺 4. 神光寺 5. 総門?  
(5を総門とすると、現総門は移築されていると考えられる。)  
6. 采女屋舗(奈良原采女家跡) 7. 真隅田家(増田家)

第3図 現地形(1:10,000)と天保十一年絵図(写)

また、境内の隣接地には、14～15世紀の石造物が多く、特に観応二年(1351)在銘の赤城塔<sup>あかぎとう</sup>(宝塔)等の仏教遺物が多く所在するのも注目される。

三夜沢赤城神社に残された文献や記録等によると、当社は明治初年まで東宮と西宮の二社が並祠<sup>(7)</sup>されていた。当社所蔵の『年代記』の記事は、貞和元年(1345)条に始まり、応永十三年(1406)条に「東社・西社」として、東西両宮について初めて記述している。また、増田家(旧西宮家)所蔵の天保十一年(1840)の八月付けの絵図<sup>(8)</sup>によれば、東宮には「竜赤寺」、西宮には「神光寺」の二ヶ寺の神宮寺が建立されていたことが認められる。現社殿は、この絵図の位置関係から東宮の奥側にあたると考えられる。瓦の採集地は、この東宮神宮寺「竜赤寺」に至近の位置と判断される。

以上のようなことから、採集された瓦は、鎌倉時代前期、既に三夜沢の地に寺院が建立されていたことを類推させる。そして、この寺院跡は『年代記』の東西両宮の存在と、絵図に描かれた東西両宮の神宮寺「竜赤寺」「神光寺」と無縁のものとは思われないことから、鎌倉時代には神社と神宮寺の両者が建立されていたことも想起されよう。

## 5 お わ り に

今回の採集遺物は、量的に少ないものの、鎌倉時代の女瓦を採集できたことに最大の成果があるといえよう。そして、鎌倉時代に瓦葺建築物＝寺院＝神宮寺が存在した可能性が推測させられたことは、たいへん意義のあることと思われる。また、鎌倉永福寺<sup>ようふくじ</sup>の創建期瓦と同一窯の水殿瓦窯跡の製品であることが確実視されるならば、波及する問題は更なるものがあるだろう。資料数が少数である点に今後の課題が残ったが、本稿が三夜沢赤城神社の鎮座時期を再検討する上でひとつの資料となれば幸いである。

末筆ながら、本稿執筆にあたり、ご教示・ご協力をいただいた諸先輩方に御礼申し上げます。

## 註および参考文献

- (1) 高崎市史編さん委員会編『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996
- (2) 群馬県教育委員会編『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』1971 による。
- (3) 勢多郡宮城村教育委員会 細野高伯氏の御教示による。
- (4) 黒坂勝美・國史体系編修會編『日本三代実録 後篇』新訂増補國史体系 1973 による。
- (5) 勢多郡宮城村教育委員会 細野高伯氏の御教示による。
- (6) 丸山陽一「水殿瓦窯跡」『第3回中世瓦研究会発表資料』1996 他による。
- (7) 宮城村誌編集委員会編『宮城村誌』1973 による。
- (8) 尾崎喜左雄「赤城神社をめぐる村」宮城村誌編集委員会編「宮城村誌」1973 による。  
赤城神社編「赤城神社誌要」『上毛及上毛人』第239号 1937  
尾崎喜左雄「赤城神社」勢多郡誌編集委員会『勢多郡誌』1958  
大場磐雄「赤城神の考古学的考察」『神道考古学論攷』1971  
尾崎喜左雄「赤城神」前橋市史編さん委員会編『前橋市史 第一巻』1971  
堀口英三校註「赤城太神宮御鎮座略本紀」群馬県文化事業振興会編『群馬県史料集 第八巻 縁起篇Ⅰ』1973  
貴志正造訳「赤城大明神の事」東洋文庫94 安居院編『神道集』1973  
神保侑史「『上野国神名帳』に表れたる神名について」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の考古学』1988  
木津博明ほか「上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986